



撮影：早矢仕有子

# 自然保護大学

人と鳥と 共生を目指して



撮影：正富宏之

**日時** 2024年11月9日（土）13時～18時

**会場** 北海学園大学教育会館1階 AV4教室（札幌市豊平区旭町4丁目1-40）  
地下鉄東豊線 学園前駅直結、駐車場はありません

**定員** 60名（先着順）

**参加費** 2,000円（会員 1,000円）

**オンライン** オンライン参加費：1,000円（会員 500円）

希望者は11月1日までに協会（メール：info@nc-hokkaido.or.jp）までお知らせください。

**講演者**：池田 憲治さん（西岡の自然を語る会 代表）

**演題**：日本野鳥の会札幌支部カッコウ調査40年の歩み 札幌の野鳥たちはいま

**講師紹介**：札幌市出身。日本野鳥の会札幌支部幹事として20年以上にわたり年間15回以上の探鳥会や自然観察会の指導運営を行う。主な観察フィールドは西岡水源池（札幌市豊平区）など。「西岡の自然を語る会」代表

**講演者**：早矢仕 有子さん（北海学園大学工学部 教授）

**演題**：シマフクロウ保全、次の10年へ

**講師紹介**：大阪府池田市出身。北海道大学農学部学生のとときに、キャンプ場でシマフクロウと出会い、大学院でその生態研究に取り組む。そこから気付けば35年余りが経過した。その間、札幌大学法学部教授等を経て、2017年から現職。

**講演者**：正富 宏之さん（一般社団法人タンチョウ研究所 特別顧問）

**演題**：タンチョウを追い払え！

**講師紹介**：1932年浦河町で生まれ、すぐに札幌へ。北大大学院で動物行動学の研究で学位取得後、32歳で釧路市立郷土博物館長となり、タンチョウに出会う。ネパールでの鳥類調査後、美唄市の専修大北海道短期大学教授・学長を経て定年で札幌へ。分布を広げたタンチョウの生活を目下追跡中。

主催：一般社団法人北海道自然保護協会

電話：011-876-8546

Webサイト：<https://nc-hokkaido.or.jp/index.html>



コケム湖にて、撮影：大館 和広

**講演者：池田 憲治さん（西岡の自然を語る会 代表）**

**演題：日本野鳥の会札幌支部カッコウ調査40年の歩み 札幌の野鳥たちはいま**

**要旨：日本野鳥の会札幌支部という団体についての紹介。野鳥とは？なぜ野鳥？の会。**

札幌支部におけるカッコウ調査の歩み、1982年の「ハロー！カッコウ・キャンペーン」（主に初鳴き初認情報）に端を発する。2024年度のカッコウ調査報告およびこれまでの年度別確認数などの報告。調査エリア、調査方法などの説明紹介。

カッコウ調査を始めたいきさつ、なぜカッコウだったのか、調査は何を目指して始めたのか。その成果は？ 確認数の推移からみた札幌近郊のカッコウの動向、調査地周辺の環境変化など調査に携わってきた市民目線からの考え。

カッコウという鳥の生態、札幌市の鳥にカッコウが選定された（1960年）いきさつ裏話など。札幌支部定例探鳥会の様子や開催地西岡水源地における野鳥の紹介。札幌周辺で観察できる野鳥、身近な自然と野鳥と人間が共生できる環境について。

**講演者：早矢仕 有子さん（北海学園大学工学部 教授）**

**演題：シマフクロウ保全、次の10年へ**

**要旨：2024年、国によるシマフクロウ保護事業は開始から40周年を迎えた。開始当初から「緊急保護対策」として実施されたのが『巣箱』と『給餌』だが、40年経った現在も、保護事業の柱であり続けている。それはすなわち、生息環境の復元が進んでいないという残念な証だが、それでも、シマフクロウの繁殖実績は向上し続けており、ここ数年は毎年40羽を超えるヒナが巣立っている。現在の北海道における生息数は約100つがいままで回復しており、個体数は保護事業開始前から3倍以上に増加したと言える。これは『巣箱』と『給餌』を継続してきた成果であるが、この2本柱への依存度を低下させることが次の重要な課題である。さらに人為的要因による事故やカメラマンによる妨害行為などの排除が急務だが、解決困難な案件も多い。保護事業50周年には、シマフクロウが絶滅危惧種の枠からはずれ保護事業を終える日が間近だと実感できるために、これからの10年を活かさねばならない。**

**講演者：正富 宏之さん（一般社団法人タンチョウ研究所 特別顧問）**

**演題：タンチョウを追い払え！**

**要旨：タンチョウはユーラシア大陸の極東部で繁殖と渡りを行う大陸個体群と、北海道内で繁殖・越冬する留鳥性の二つの群れがある。江戸時代までは蝦夷地の海岸近くとか、やや内陸の石狩や釧路の湿原のほか、東北地方の一部でも繁殖し、越冬のため関東まで渡るのもいた。しかし、過剰な狩猟と近代化に伴う農地開発により、前世紀初めには絶滅との声もあった。ところが、1920年代に道東で残存個体が見つかり、以後、行政的な保全施策と民間の自主的保護活動で羽数は回復し、分布域も今や道北や道央へと広がりつつある。ただ、タンチョウの行動規制は一切行わないというヒトの対応は、過剰な人馴れによる交通事故死の増加や、農作物への加害を招いている。特に稲作地帯でのイネの倒伏・未熟稲穂の摂食が多発する気配は見過ごせない。対応として、タンチョウの学習能力を基に加害抑制方法を見出すことこそ、ヒトとツルの共存のため急ぎ解決すべき課題に外ならない。**